

平成 22 年 5 月 15 日現在

研究種目：若手研究（B）

研究期間：2008～2009

課題番号：20720117

研究課題名（和文）グループ・ディスカッションにおける合意形成の成り立ちと問題点

研究課題名（英文）Processes and problems of consensus-making in group discussion

研究代表者

鈴木 佳奈（SUZUKI KANA）

広島国際大学・心理科学部・講師

研究者番号：20443252

研究成果の概要（和文）：本研究は、大学生によるグループ・ディスカッションの実データをもとに、ディスカッションにおける合意形成の成り立ちと問題点を談話分析的に解明するものである。データから観察されるディスカッションの全体構造，参加者の言語・非言語行動を分析し，合意形成にあたって起こりうる問題点を3つに類型化した。さらに，これらの問題点をふまえ，大学生のディスカッションをサポートする支援ツール「議論ステップモデル」を試作した。このツールを使って，グループ・ディスカッションの典型的な流れを知り，限られた時間の中で系統立てて議論するトレーニングを行うことは，学生にとって実社会でのディスカッションの場でも自律的にふるまうための基礎となると考えられる。

研究成果の概要（英文）：This study investigates processes and problems of consensus-making in group discussion among Japanese undergraduate students, by applying discourse analytic approaches to video-recorded natural discussion data. Examining every detail that relates to the course of discussion, from the overall structures through which decisions were made, and verbal/non-verbal behavior of each participant, we identified three groups of problems that might hamper logical and smooth decision-making. The study further proposed a discussion-supporting tool for undergraduates with which they could learn how to build up their arguments step-by-step in order to reach a legitimate conclusion within a limited amount of time.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	2,300,000	690,000	2,990,000
2009年度	1,000,000	300,000	1,300,000
年度			
年度			
年度			
総計	3,300,000	990,000	4,290,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学・言語学

キーワード：談話研究，グループ・ディスカッション，合意形成，大学生，議論支援ツール

1. 研究開始当初の背景

グループ・ディスカッションは、問題発見や問題解決の効果的な方法として、社会の様々な場面で広く取り入れられている。日々の会議やミーティングはもとより、近年特に目覚ましいのは、ディスカッションを通して市民が社会的意思決定に参画する動きである。裁判員制度での評議、テクノロジー・アセスメントの一手法であるコンセンサス会議、公共政策に対するパブリックインボルブメントなど、グループで社会問題を話し合い解決していく機会はこれからますます増えていくことが予想される。大学生に対する就職面接にグループ・ディスカッションを取り入れ、それによって応募者の能力を判断する企業が増えているのも、社会の動きに沿うものである。

これらのディスカッションは、当然のことながら、ある課題に対して結論を出すことを最終目的としており、一旦まとまった結論に関して、事後にその妥当性を検討することはそれほど重視されていない。しかし、実際には、時間の制約のために十分な議論がなされなかったり、参加者の力関係のために全員の意見が反映されずに安易に合意がなされてしまったりすることもありうる。また、意見の対立が収束せずに物別れに終わってしまうこともあるかもしれない。今日のようにディスカッションによる意思決定が社会的に大きな影響力を持ちうる状況では、参加者自身が合意形成の過程をチェックしつつ、出された合意内容の妥当性を検証するスキルを身につける必要があるだろう。

社会の中でのディスカッションへの注目度が増すにしたがって、様々な分野でディスカッションや合意形成にかかわる研究が行われている。社会心理学の分野では、Janis (1982) の「集団浅慮 (groupthink)」の研究に代表されるように、集団での意思決定の利点・弱点が早くから指摘されてきた。近年では、公共事業としての道路計画・土木政策や紛争解決、教育など、実際にグループ・ディスカッションを活用する立場からの実践的研究も盛んになっている。また、学術書以外でも、ディスカッションの進め方や、効果的かつ効率的な会議術を指南するビジネス書も数多く出版されている。

このような社会の動きや研究の展開に伴って、大学においても、学生の「コミュニケーション能力」を育成する一環として、授業でグループ・ディスカッションの方法論を教えるための評価指標や教材の開発が求められ始めた。このニーズに対応するためには、

まずディスカッションに不慣れな学生が行うディスカッションとはどのようなものを明らかにし、特に、ディスカッションの最中に彼らが直面する様々な問題を整理した上で、それをどうサポートすることができるかを検討しなければならない。従来の研究のような心理学的アプローチだけでなく、言語学、談話分析、社会学からの知見を取り入れ、ディスカッションのアウトプットに対する評価のみならず、アウトプットに到る過程や、ディスカッションに参加する人々のふるまいとその影響などの側面に焦点を当てた研究を行う必要があると考える。

2. 研究の目的

1 で述べた研究の背景を受けて、本研究は、大学生が実際に行ったディスカッション事例に見られる合意形成の諸側面を分析し、参加者の発言や言語行動から合意形成にあたって起こりうる問題の在処を特定・類型化することを目指す。さらに、大学生がディスカッションを行う際に、上で特定されたような問題に自ら気づき、それを修正しつつ、論理的かつスムーズに合意に至ることができるようなディスカッション支援ツールの開発も試みる。

3. 研究の方法

(1) 使用データ

本研究では、図1のような状況でビデオ収録された大学生のディスカッションを談話データとして使用した。



図1：ディスカッションデータ収録風景

ディスカッション参加者は、関西の大学に通う2～4年生の男女54名で、ほぼ全員がデータ収録時に初めて顔を合わせた間柄である。この54名を、男女比が1：1になるよう、6人一組の9グループに組み分けた。各グループは3回ずつ、異なるテーマについて

40 分の制限時間でグループの結論を出すよう指示された。また大学生のみのディスカッションと比較する目的で、合計 27 セッションのうち、6 セッション（6 グループ×1 回ずつ）には、プロのディスカッション司会者にも参入してもらった。

ディスカッションのテーマは、大学生にとって身近な問題で、なるべく賛否の別れるようなものを採用した。

（テーマ 1）YouTube は規制すべきか、規制するならどのような方法で規制すべきか。

（テーマ 2）監視（防犯）カメラは設置すべきか、設置するならどのような条件で設置すべきか。

（テーマ 3）大学のレポート課題においてウィキペディアの利用を認めるべきか、認めるならどのような形で利用まで認めるか。

このようにビデオ収録されたデータをデジタル化し、分析のためにすべて書き起こした。

(2) データ分析の方法

27 セッションあるディスカッションのビデオデータおよびその文字化資料を以下のような観点から観察し、ディスカッション過程や参加者のふるまいで特徴的なものを抽出した。

(a) グループの合意はどのように形成されるのか：これまでのケーススタディでは、ディスカッションの全体構造は大きく「個別討論」と「合意に向けての最終検討」の段階に分けられることが示されている。また、後者の典型的な流れは、「これまでの議論のまとめ」→「結論案の提示」→「結論案の承認（否認）」→「合意形成」というものである。その流れを制御する発言や言語行動を抽出・分類した。

(b) 個々人の意見や全体での議論が合意内容にどの程度反映されているのか：合意内容のキーワードや言語形式と、そこに到るまでやりとりされた個々人の意見や全体での議論を比べ、合意内容に反映された意見／議論と切り捨てられた意見／議論を峻別した。

(c) (a)と(b)の結果を踏まえ、少人数での強引な採決や安易な賛同など、合意形成にあたって問題となりうる参加者の発言や言語行動を特定する。その際、特定された発言や言語行動が合意形成にとってどう問題となるのかを具体的に示す。さらに、それら特定の発言・言語行動をより普遍的なパターンへと類型化した。(図 2)

4. 研究成果

(1) 合意形成の妨げとなりうる問題点の特定

	A	B	D	E	F	G
1	No.	0	4		8	
2	プロセス/タ ン	0	100		1000	
14		△1 積極的な発言がない 全員で一つの意見を突き詰 めたい姿勢が見られない [1-1-2][2-48-E]	△1 積極的に誰も発言しな い [1-1-1]	△1 異なる立場の意見を徹 しと上げない [1-1035-B]	△2 異なる立場の意見を徹 しと上げない [1-1035-B]	2-A 2
15		△2 ミット・デミットというよ うな二つの側面を積極的 に考えてみる [1-2][1032-F] ※こ れは支援者の効果	△2 誘導されても自分の意 見を述べない [1-1][1344-E]	△2 本題を指向した発言を する [1-1][1344-E]	△2 本題を指向した発言を する [1-1][1344-E]	2-B 4
16		△1 全体への問いかけ「どう でしょう？」 [1-2][121-A] ※これも支援者の効果	△1 あいづちや受け止めがあ る [1-2-2]	△1 45 本題から少し離れた （著作権協会）の話になっ てしまった。情報提供が簡 潔でない [1-1][1116-C] ※こ れは支援者の効果	△1 45 本題から少し離れた （著作権協会）の話になっ てしまった。情報提供が簡 潔でない [1-1][1116-C] ※こ れは支援者の効果	5-B 4
17		△1 積極的に発言する と見えない [1-1-2]	△2 時々自分たちがなぜ 今この話題を話しているの かを見失っている [1-1-2]	△2 支援者が途中で発言を 取るため多くと、参加者 がそれを持ってしま [1-2-1]	△2 支援者が途中で発言を 取るため多くと、参加者 がそれを持ってしま [1-2-1]	1-A 1
17		△1 45 発言を促進してしま う [1-2]	△2 ある意見に対する別の 視点が何回か出される [1- 2-2]	△1 支援者と参加者の一問 一答になっている [1-2-1]	△1 支援者と参加者の一問 一答になっている [1-2-1]	1-C 1

図 2：データ分析過程（一部）

研究の方法 (2) で述べたデータ分析方法に従って、最終的に大きく次の 3 つの問題を特定した。

- ① 全体の流れの見通しの欠如
- ② 課題の理解・確認不足
- ③ 個々の発言の検討不足

① 全体の流れの見通しの欠如

プロの司会者がいる場合と、学生のみでディスカッションを行う場合とで、決定的に異なるのは、合意形成までの全体の流れについて見通しを立てている（あるいは立てられない）者がいない、ということである。この問題は、ディスカッションのあらゆる局面に関係してくる。

例えば、学生のみでディスカッションでは、事例 1 のように、最初から一人一人が「賛成」「反対」の意見表明を行うのが典型的であった。

【事例 1】（Youtube 規制について。自己紹介の直後）

- B: え：とじゃあユーチューブがまず：(0.3)最初に規制すべきかですよね
- E: うん
- B: え：とどうでしょう一人ずつゆっていきます？それとも何か(0.3)誰か(0.4)言ってくれたら
- F: ふ：ん
- E: とりあえず順番に意見でも言ってみます？
- B: 言うてみます？
- B: え：とじゃあ私から行きますけどもえっとユーチューブで人権(0.1)人権侵害とか…(省略)どの程度までっていうのはまだはつきり考えてないですけど規制はすべきだと思います。はい以上です。
- A: え：とじゃあ、え：と：ドラマとかえ：と明らかな映像のものを(0.5)え：著作権があるものはそのまま流すのはやっぱりある程度規制はした方がいいと思いますけど…(省略)
- (省略：全員が一通り意見を言う)
- C: あの：(0.2)まだ(0.3)一概に(0.2)規制するしないとはまだ(0.6)はい言えないですまだ

- みんなの意見をとりあえず聞いてみたいと思います
 → (1.7)
 →B: そう: ですねえっと:
 → (0.9)
 B: 皆さんユーチューブ使(0.9)ってますか

このような形で話し合いを始めた場合、一巡したあとで長い沈黙が起こり、それまでの意見表明を仕切りなおす発言が誰かから出る。極端なケースでは、最初に出た意見が全員同じようなものであったために、「みんな同じ意見なんだからこれでいいじゃないか」という雰囲気になり、各自の意見の相違点を見つけて検討したり、反対の立場の見解を考えてみたり、というところまで議論が深まらなくなったものもあった。

全体の流れの見通しの欠如は、ディスカッションの最中にもしばしば問題となる。自発的に司会役になった学生でも、その先をどう進めたらよいかとまどう様子が随所に見られた。さらに、それによって、制限時間内に結論がまとまらなかったり、逆に時間をもてあましてしまったりということも起こっていた。

【事例2】(Youtube 規制について。開始から35分ほど経過)

- A: あ: も: あとごふんくらいか:
 A: あは [は: L
 C: [ん:
 A: そ: つすね: . . . , じゃ: . . . なんかいままとまってる意見でゆったらまずち誹謗中傷は: . . . まず規制すべきであ [って: . . .
 D: [ん:
 A: で: (省略) テレビの: (0.5) えぞ: だとかは: 規制しなくてもいい: (1.8) てゆ: . . . 意見で: (0.7) まとまりなんですかね: . . .
 → C: ん: . . .
 A: ん:
 →A: これで終わりでいいのかな

②課題の理解・確認不足

与えられた課題自体を分析せずに議論を進めようとするため、同じ言葉で指し示しているものが人によって異なっていて話がかみあわなかったり、各人が自分の意見を述べる際に異なる側面を根拠として挙げてしまい議論が平行線になり妥協点を見出せない、などの困難さが観察された。

【事例3】(監視カメラ設置について。開始から8分20秒ほど経過)

- C: じゃ防犯カメラの設置は: . . . (0.4) えっと: . . . (1.3) [みなさんは認める: (0.6) ってゆうことですね:
 A: [みとめ: . . .
 D: はい
 B: はい:

- C: でどのような条件でってゆうのは: . . . ん: . . . :
 トイレとか: . . . (0.3) お風呂とかそ: ゆう(1.5) すごいしてきな: (0.3) 空間は: . . . (1.5) 見せない:
 D: ん: . . . ん: . . . :
 C: でほかはべつに見せてもいい: (0.2) てゆうことなんです(0.0)かね: . . . :
 D: ん: ん:
 C: トイレやお風呂以外に: . . . (0.7) 見せたくない: (1.8) 場面てゆうのは: (0.4) どこですかね
 例えば:
 →D: 監視カメラって: 公共の場につけるもんです
 よね: . . . :たぶん
 →C: たぶんたぶん:
 →D: 公共の場のみなんですよね:
 →B: あ: でもマンションとか: . . . (0.6) あといま
 なんか: . . . (0.5) 電車って書いてあったし: . . . :

事例3までの議論では監視カメラの設置について賛成の意見が大多数を占めており、それらの意見を踏まえてCが設置場所の条件をまとめていこうとしている時に、Dによって「監視カメラはそもそも公共の場に設置されるものではないか」という疑問が出される。このように、例えば「監視カメラ」をどう定義するかということについても話し合っただけで決めるべきであるにもかかわらず、そのような課題自体の分析はあまり行われない。事例3のようにたまたま疑問が出るとその点を取り沙汰されるが、全員で改めて定めるといふより、誰か一人の見解が共通認識のように受け入れられてしまう、ということがよく見られた。

③個々の発言の検討不足

全体的に、場に出された発言の妥当性を客観的・論理的に検討しないまま次の発言を出す傾向が見られた。例えば上で挙げた事例1でも、それぞれの人が出した意見に対して、ほかの人からの確認質問や詳細についてのコメントはまったく見られない。このように、各人が意見を言いっぱなしになって議論が積み重なっていかない。意見や議論のすりあわせは、事例2のAのように、自発的にまとめ役を買って出る者の裁量に任されている部分が大きく、自分の意見がどのように結論に反映されているのかについて各人がチェックをするというようなこともなかった。

(2)議論ステップモデルの試作

(1)で類型化した問題をふまえ、「是非決定型」課題の話し合いを想定したディスカッション支援ツールの一環として、図3のような「話し合いの見取り図」を作成した。話し合いの個々のステップおよび流れを特定する際には、ディスカッションデータからプロの司会者の議論の進め方を抽出して取り入れた。

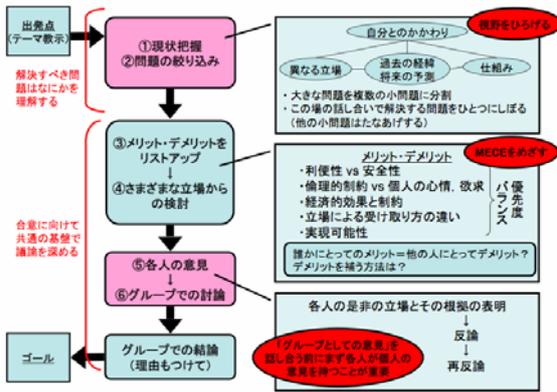


図3：議論ステップモデルにおける話し合いの流れ

さらに、議論の全体を構成する6ステップそれぞれに対応したワークシート（図4）を用意した。

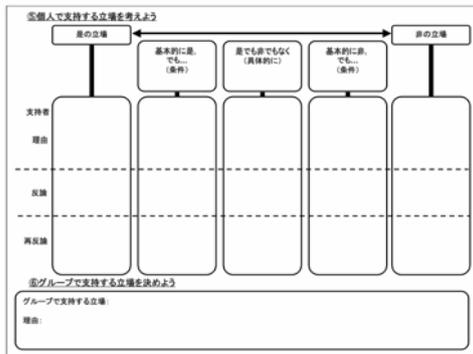


図4：議論ステップモデル試作（一部）

ここで試作した議論ステップモデルは、芝浦工業大学、愛媛大学などでディスカッション授業の一環として実際に使用してもらった。（図5）

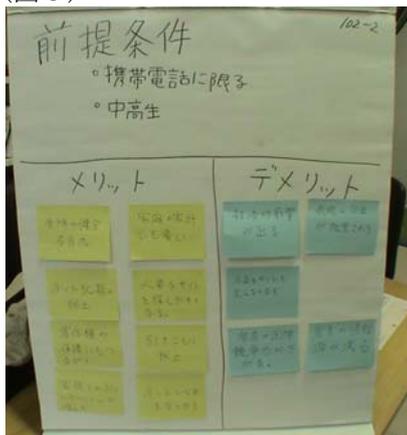


図5：議論ステップモデル使用例（愛媛大学）

実際に使用した教員・学生からは、「楽しんで作業できる」「ディスカッションの全体像が理解できた」「やることがはっきりしていて集中できる」などの肯定的な評価があった一方で、「テーマによってはこのような画一

的な進め方がそぐわないものがあるのではないか」「シートを埋めること自体が目的となってしまう」「シートを使って学ぶべきことへの意識が薄れてしまう」「テーマについてどの程度議論が深まれば、『議論し尽くした』という感覚が生まれるのか見えにくい」など、改善を求める指摘もあった。これらの指摘を取り入れつつ、「議論ステップモデル」をより使い勝手のよいものに改良することは今後の課題としたい。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計1件）

Suzuki, K., Morimoto, I., Mizukami, E., Otsuka, H., and Isahara, H. An exploratory study for analyzing interactional processes of group discussion: The case of a focus group interview. *AI & Society*, 査読有, Vol. 23, No. 2, 2009, pp. 233-249

〔学会発表〕（計1件）

串田秀也, 鈴木佳奈, 情報の受け取りに抵抗する確認質問, 社会言語科学会第22回研究大会, 2008年（平成21年）9月13日, 愛知大学

〔図書〕（計1件）

鈴木佳奈, 昭和堂, インタラクションの境界と接続（『より知る者』としての立場の確立—言い間違いの指摘とそれに対する抵抗—）, 2010, 318-339

〔産業財産権〕

○出願状況（計0件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計0件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：

番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等 なし

6. 研究組織

(1) 研究代表者

鈴木 佳奈 (SUZUKI KANA)
広島国際大学・心理科学部・講師
研究者番号：

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

()

研究者番号：